

「バースデー」

—2 稿—

2025/12/31

米俵

〈人物表〉

小嶋 聡美	(40)	会社員
原田 恵理	(41)	聡美の同僚
小嶋 勝	(48)	聡美の夫
小嶋 太一	(13)	聡美の息子・中学生
ノア	(28)	新興宗教リーダー

スタッフA

1. スーパー・店内（夜）

大型スーパーの店内。客はまばら。
お弁当コーナー。小嶋聡美（40）、スマホを確認する。

（スマホ画面）聡美が送信したメッセージ。「今日遅くなるからお弁当でもいい？」 未読の状態。

聡美、大きな溜息がでる。

あきらめた様子で、食材コーナーへ向かう。

2. 小嶋家・玄関（夜）

中古マンション。真っ暗な玄関。

聡美、電気をつける。散らかった靴。

聡美 「ただいまー。遅くなって、ごめんね。すぐ作るから」
返事はない。

聡美、廊下に脱ぎ捨てられた服を拾いながら進む。

3. 小嶋家・リビング（夜）

真っ暗なリビング。

聡美、リビングのドアを開け、驚いた様子で、

聡美 「えっ、いないの？」

その瞬間、クラッカーの音と共に電気がつく。

クラッカーを持った小嶋勝（48）、小嶋太一（1

3）が満面の笑みで、

二人の声「ハッピーバースデー」

聡美、ハッとして、

聡美 「あっ、そっか」

勝 「ほらな。言っただろ？」

太一 「本当だ。なんで、忘れんだよー」

勝と太一、おかしそうに笑う。

勝 「ほら、座って」

と、聡美の持っていた物を奪い、雑に放る。袋から

は鈍い音。

聡美、それを横目で見るが、何も言わず笑みを作る。

勝 「はい、40歳記念。大台だな」

と、ろうそくのついたケーキを差し出す。

聡美、苦笑いで、ろうそくを吹き消す。

勝・太一「おめでとう」

太一、得意げに、

太一「今日は、俺たちの力作」

テーブルには不格好な料理が並んでいる。

聡美「ありがとう。豪華だね」

太一「見た目はアレだけど、絶対うまいから」

勝「太一、意外とセンスあったよな」

太一「まあね」

聡美「楽しみだな。いただきます」

勝、太一、ひと口食べる聡美を見つめる。

聡美「うん、美味しい」

と、笑顔を向ける。

太一「やった、それ俺が作ったやつ」

勝「俺のサポート付きだね」

太一「いやいや、全然ひとりでいけたし」

楽しそうに笑う二人。

聡美、二人を見つめながら、ゆっくりと箸を置く。

床に置かれたままのスーパールの袋。

× × ×

聡美、テーブルの上のお皿をまとめ、台所へ運ぶ。

ひどく散らかった台所が目に入る。

数秒固まる聡美。

目を閉じ、大きく呼吸する。

ゆっくりとシンクにお皿を置き、台所からリビング

の様子を見る。

散らかった部屋。太一はテレビゲームをし、勝はソ

ファアに横になり、スマホをいじっている。

聡美、スポンジを水に濡らし、握りつぶす。

4.

会社・室内（昼）

お昼休み。ランチに向かう人々。

聡美、動く気力がない様子。自分の席に座り、ボー

っと一点を見つめている。

原田恵理（４１）が近付き、明るく声をかける。

恵理 「何かあった？ ランチ行く？」

聡美、頷いて、ゆっくりと立ち上がる。

5. 会社・食堂（昼）

ほぼ満席の食堂。がやがやとしている。

恵理 「それで？ 聡美が片付けたの？」

聡美、頷く。

恵理 「優し過ぎ」

聡美 「そう……かな？」

恵理 「料理は片付けまでって教えないと」

聡美 「んー。それすら面倒で……」

恵理 「まあ、分かるけどね。やっても雑だし」

聡美 「本当そう」

と、笑顔になる。が、すぐに無表情になって、

聡美 「……毎日、おんなじ。ただ過ぎてくだけ」

と、手元の紙ナプキンを何度も折りたたむ。

恵理、黙って聡美を見つめる。

聡美 「恵理はいつも元気で羨ましい」

と、力なく笑う。

恵理 「ね、今日、仕事のあと空いてる？」

聡美 「え？」

恵理 「私の元気の源」

と、ライブ映像を見せる。客席の熱狂が伝わる。

聡美 「楽しそう。別世界って感じ」

恵理 「救われるよ。現実なんてどうでも良くなるから。行こうよ」

と、チケットを二枚見せる。

聡美、手元に視線を落として、

聡美 「ありがと。でも、ごめん。今日は……無理かな」

恵理、察して、

恵理 「男二人は勝手にやるって」

聡美 「そうかな？ また何か言われそうで……」

と、困ったような表情で笑う。

恵理 「まあ、気が向いたら来て。誕生日プレゼント」

と、聡美にチケットを渡す。

聡美 「行けないよ？」

恵理 「気にしないで。その時はまた誘うから」

聡美、チケットを見つめる。周囲の喧騒が遠のく。

6. 会社・出入口（夕）

小雨が降っている。

傘を広げる人、駅へ走り出す人がいる中、聡美だけが、立ち止まり空を見上げている。

鞆から傘を取り出そうとして、光るスマホに気付く。
（スマホ画面）勝からのメッセージ。「太一、今日は友達の家泊まるって。俺も遅くなる」

一瞬、息を呑む聡美。

すぐに恵理に電話をかける。

高揚した声で、

聡美 「今どこ？」

7. ホール・室内（夜）

座席には紫の布が掛けられている。所々、その上から白い布が掛けられている席もある。

ステージ中央には白い幕、天井からは金の布が垂れている。
紫の布で巻かれた石のようなものがいくつ
か置かれている。

薄暗い照明の中、観客たちがぞくぞくと席につく。

恵理、慣れた足取りで進む。その後ろを恐る恐るついていく聡美。

恵理、前から二列目、中央寄りの席に腰をおろす。

聡美、座席に白い布が掛けられているのを見て、

聡美 「えっ、私、ここ？」

恵理 「聡美はゲストだから」

聡美 「ゲスト？」

恵理 「初めての人は、みんな白なんだよね」

スタッフAが近付いてきて、
スタッフA「こちら、お使い下さい」

と、ペンライト、ブレスレットを渡される。

聡美「ありがとうございます」

と、戸惑いつつも受け取る。

周りを見渡し、他にも配布されている人を確認する。

恵理「ゲストはみんなもらえるから。ほら、つけて」

と、聡美の腕にブレスレットをつける。

聡美「こういうのは、買うのかと思ってた」

恵理「ここは特別。これで聡美も仲間だね」

と、微笑む。

会場が暗くなる。歓声とペンライトの光の波が広がり、紫一色に染まる。

手拍子と共にカウントダウンが始まる。

爆音と共に幕が上がり、ノア（28）が姿を現し、歌とダンスのパフォーマンスが始まる。

歓声が一段と大きくなる。

聡美、戸惑いながらも周りに合わせるように、ペンライトを振る。

手を振るリズムに少しずつ体が乗っていく。

周囲の観客と一体になり、自然と笑みがこぼれる。

× × ×

真っ暗な会場。

舞台上のノアだけに柔らかい光の照明があたる。

各所からノアを呼ぶ声が聞こえてくる。

ノア、俯き気味で話し始める。

ノア「この世界は……頑張った人ほど黙るように出来ています」

「

静まる会場。

ノア「我慢して、空気を読んで、誰かの期待に答え続けて」

聡美、じっと聞き入る。

ノア「それでも何も変わらず、自分が足りないんじゃないか、そう思った人もいるでしょう」

聡美、真剣な表情。

ノア 「でも、違います。あなたが悪いんじゃない」

ノア、顔を上げる。

ノア 「この場所に来た人は、もう選ばれる側じゃない」

一拍置いて、

ノア 「ここを選んだあなたが正しい。ためらう必要はありません」

ノアが強い光に照らされる。

ノア 「私が味方です」

歓声が上がる。

一定のリズムでジャンプする観客。会場が揺れる。

ノア、会場を見渡す。

ノアが聡美の方を見る。

聡美、動かず、目を見開き、ノアを見つめる。

ノア、それに答えるように微笑みながら頷く。

聡美、自然とジャンプし始める。

8.

小嶋家・玄関前（夜）

聡美、スマホを確認。

（スマホ画面）ファン用コミュニティ通知が次々届く。「ご購入ありがとうございます」「ポイント獲得。ランクが上がりました」「ノアから祝福のメッセージが届いています」

聡美、画面を見つめ、にやける。

通行人の酔っ払いが歌う『Happy birthday to you』が聞こえてくる。

聡美、ブレスレットに触れ、嬉しそうにする。

9.

小嶋家・玄関（夜）

散らかった玄関。靴下が脱ぎ捨ててある。

聡美、バッグから紫の布に包まれた石を取り出す。

靴箱の上の荷物を端によせ、大切そうに飾る。

脱ぎ捨てられた靴下を確認し、思いきり蹴飛ばす。

聡美の口角がゆつくりと上がっていく。

（おわり）